

金の装飾がどこされた豪華なアームチェアに座り、謁見してくる人々を見下ろす。詰め込まれて暗記した言葉をひたすら繰り返しているだけなのに、こちらを見上げてくる人々が品定めしてくるかのように視線を向けてくるから気が抜けない。

口のナカが乾燥して、背筋をピンと伸ばした姿勢もつらくなってきたころ、豊かな金髪を翻しながら令嬢が一步進み出た。

「聖女様、この度はご機嫌うるわしく存じます。聖女様の神力でますます我が国が栄えますよう」

凜とした声で堂々と振舞う令嬢が、わたしを睨んでいるように見えて先ほどまで何度も繰り返した言葉が一瞬頭からとんでしまう。

「……あ、」

「聖女様、『絶えることのない神の威光が、イルミナスをあますことなく照らし

ますように』ですよ」

わたしの側に控えていた騎士がこっそりと耳打ちしてくれる。それであろうや
く自分が何を言うべきか思い出して、彼が教えてくれた言葉を一言一句違わず
繰り返した。

「た、絶えることのない神の威光が、イルミナスをあますことなく照らします
ように……」

令嬢は恭しく頭を下げて一礼する。その背後で宮廷の令嬢たちが扇子で口元
を隠して、何やら囁き合っているのが見えた。

——なぜ異世界から召喚されたというだけのなんのとりえない女が、長
年の研鑽を積んだ由緒正しい家柄の令嬢を押しつけて聖女になっているんだろ
う。神の気まぐれはよくわからない。

高座まで声は届かなかったが、おおよそそんな陰口をいつているに違いない。

彼女たちがそう思うのも無理はない。どうにか早くこの式典が終わってくれないだろうか、とわたしはそればかり考えていた。

無事に式典を終えると、教会の司祭たちがわたしを取り囲む。みんな一樣に張り付いたような笑顔を取り繕ってはいるが目の奥が笑っていない。

「マナさま、お疲れ様でした。ただもう少し聖女らしく堂々となされなくては」
降り注ぐお小言に、わたしは露骨に顔をしかめる。疲れているから早く休みたいのに、まだわたしを部屋に帰してくれないらしい。

「……っ、わかったから。でも、もう今日は疲れたの。早く部屋に帰って休みたい」

「ええ、慣れないお勤めでお疲れなのは重々承知です。しかしですな……」
「皆様、もうそのあたりで。マナさまには自分からもよく申し上げますから」

背の高い純白の騎士服を着た男が、わたしと僧侶たちの間に割って入る。

「ハワード殿、しかし……」

「教会のことを心配されている皆様の気持ちはわかりますが、どうぞご容赦を」
深く頭を下げるハワードに、僧侶たちはしぶしぶといった様子で、わたしを解放してくれた。

「マナさま、慣れないお役目お疲れのことでしょう。頑張りましたね」

決まり文句すら頭からとんだ女を庇うハワードに、わたしは顔をしかめる。

ここイルミナスでは、聖女の隣に眉目秀麗な若い男の騎士を従わせる習慣がある。ハワードは、わたしが召喚され聖女と認められてから、わたしのおつきになった男だ。白い聖騎士の服がよく似合う長身の男は、女の子であればだれでも見とれてしまうに違いない恵まれた外見の男だった。琥珀色をした切れ長の瞳は少し吊り目がちで、少し癖のある黒髪を肩まで伸ばして一つにくくつてい

る。幼いころからいつか現れる聖女に仕えるべく、厳しく育てられたらしい。

彼は周囲の期待に応えて、洗礼された騎士に育った。

ただ、彼の唯一の誤算は、使える聖女がわたしのようなポンコツだったことだろう。日本で要領の悪い会社員をしていただけのわたしが、神の代理人として祭事を執り行い、人々を教え導くなんてことは荷が重い。

「別に、庇ってくれなくてもよかったのに。こんなことをするとハワードの評判まで悪くなるんじゃないの？」

「いいえ、マナさまが頑張っているのはオレにはわかってますから」

わたしと違って優秀な側近に問えば、ハワードはニコニコと完璧な笑顔を向けた。その笑顔に隙がなさ過ぎて、胡散臭い。わたしだったら、血のにじむような研鑽の末に仕える主人が自分のような女だったら、間違いなく文句の一つでも言いたくなるからだ。

「ふうん、ハワードはちゃんと心からわたしに仕えてくれるってそういいたいわけね」

含みを持たせたような言い方でハワードを見つめると、彼はためらいもなく頷いた。

「当然ではありませんか。聖女さまは、オレの真心を疑ってらっしゃるんですか？」

真心、なんて台詞を臆面もなくいえる彼に冷めた笑いが出る。どう考えても優秀な聖女ではないわたしを無理に庇うのは、自分が仕えている主人を無能だと認めたくないんだろう。

いっそのこと、彼の手に負えないほどの無茶をいって困らせてしまおうか。そんな馬鹿な考えが頭に浮かぶ。

「じゃあ、わたしのお願いなら、どんな頼みでもきいてくれるのね？」

「マナさまがオレに頼みなど珍しい。もちろん、どんな願いでもあなたの望みとあれば全力で叶えますよ」

「じゃあ、わたしの部屋にきて」

声を潜めてそう告げれば、ハワードのカラダがわずかに硬直する。

「わたし、疲れちゃったからなぐさめてほしいの。これ以上は、いわなくってもわかるよね？」

平凡な容姿をしているという自覚はある。先ほど式典で言葉を交わした、わたしが召喚されなければ聖女になっていただろう金髪令嬢は、目が覚めるような美人だった。日本にいたときによくテレビで見ていた、海外の女優さんよりも綺麗かもしれない。おまけに品行方正で評判もいいらしい。誰だって担ぎあげる神輿は美しい方がいいだろう。

わたしがうっかり異世界に召喚なんてされなければ、ハワードは彼女の騎士だったことになる。ハワードは美しい主人に仕えるチャンスを失っただけでなく、不本意に仕えている主人に、いやらしい世話までさせられようとしているのだ。

一瞬の沈黙がわたしたちの間に流れる。自分から仕掛けたくせに、一目散にこの場から逃げ出したい気分だった。

「……それは、オレにあなたを抱けということでもよろしいんですか？」
わざわざ確認してくるハワードに、ぎゅつと拳を握りしめる。

「っ、そうよ。そのくらいわかるでしょ」

こんなの、セクハラだ。最低だ。わかっているのに、いまさら発言を繰り返せない。原因はわかっている。あの令嬢だ。カーテシーをする仕草だけでも気品に圧倒されて、みじめに嫉妬している。優しくしてくれるのがハワードしか

いないから、勝手に依存して、好きになってしまった。本来であれば到底釣り合わないことを思い知らされて、こんな無茶ぶりで、ハワードを試そうとしている。

「いいんですか？ オレごときがあなたを抱いても」

「え」

予想外な言葉にまじまじと整った顔を見れば、いつも嘘くさく微笑んでいる男が恍惚とした熱を瞳に宿らせていた。あからさまな欲情に、身がすくむ。ただハワードの顔を見つめるしかできないわたしに半歩近づいたハワードが、低く甘い声で囁いた。

「マナさまのお望みとあれば、たつぷりと奉仕させていただきますね」

聖女として与えられた部屋に二人で戻り、後ろ手で扉を閉めた瞬間に腕がにゅっと伸びてくる。式典用の白いローブのままのわたしを、ハワードはすっかり腕の中におさめてしまった。

「え、ハワード」

自分から仕掛けたくせに身がすくむ。服越しでもわかるゴツゴツとした身体の感触は、はじめて知るものだ。とくと心臓が早鐘を打って、どうすればいいかわからなくなる。

「なぐさめてほしいだなんて、そんなかわいらしいこといつから思っていたんですか？ 早くいつてくださればよかったのに」

頬を撫でられて、視線が合う。琥珀色の瞳がうっとり細められて、妙に熱っぽい。

唇が近づいてきて、思わず顔を背けてしまった。口の端にやわらかい感触が

触れる。

「ま、まって……」

「逃げちゃだめでしょう。あなたが望んだんですから」

長くて骨ばった指先に顎を掬われて、ゆっくりと唇を押し当てられる。ひんやりとしているのかと思ったけれど。案外熱っぽい。まだキスされているだけなのに、他人の体温が自分のカラダに広がる感覚にドギマギする。

「あ」

「怖くありませんか？」

わたしを気遣う言葉に、まるで子ども扱いされたような気がして頭に血が上る。頭の隅に、あの金髪の令嬢がちらついた。あの人になら、こんな扱いをしないくせに。

「怖くなんてないわ。そ、それとも、わたしから逃げたくなっただの？」

平然と言い返したはずなのに、少し声が震えてしまう。情けない。決まりきった言葉を繰り返すだけの式典も上手にできない。鼻のあたりにツンと痛みが走る。

「……マナさま、泣いてるんですか？」

「な、泣いてないわよ。へんなこといわないで！」

睨みつけていると視界がぼやけてくる。自分でもどうしたのかわからなくて混乱していると突然深いキスをされた。

「ん?! ふんんんんん」

口腔にねじ込まれた熱い舌が粘膜をべろべろと舐めまわしてくる。くちゆくちゅ♡といやらしい音を立てながらのキス。唇が触れただけのそれとは比較にならない、ハーワードの熱にカラダが浸食される。

「ふえ、な、なに？」

「やさしくして差し上げようと思っていたのに、そんな泣きそうな顔をして、オレを煽るからですよ♡」

背中のホックを外されて、白い絹にふんだんに金糸で刺繍されたローブが重みに従って床に落ちる。胸を覆っていたコルセットの紐もあつという間に解かれて、白く丸い膨らみが露出した。

「なっ」

「ああ、かわいいおむねですね♡オレの手に少しあまるくらいのサイズで、ちょうどいいです♡」

やわやわと胸を撫でさすりながら、微笑みながら顔にキスを降らせる。本当に愛されているかのような行為に、頬が熱くなっていく。

わたしのことを抱くハワードをいつの日か想像してみたことがある。穏やかな笑みは崩れて、忌々しそうに眉を歪ませて、なにかの作業のような義務的な

手つきだった。

でも、現実とは全然違う。ちゃんとハワードの指に体温が通っていて、声は控えめだけど弾んでいて、眉はやさしく垂れている。

周りの人はわたしのことをバカにしているけれど、ハワードだけは違うなんて浅はかな考えに縋りたくなってしまう。都合のいい考えを信じそうになって内心で頭を振って、ハワードの腕から抜け出して、ベッドに腰を下ろした。睨みつけて、挑発するように足を開く。

「誰があなたの好きなようにわたしの肌をまさぐっていいなんていったの？ ハワードはわたしに、犬のように奉仕すればいいの」

これだけ告げれば、頭のいいハワードのことだから自分がどれだけ屈辱的な命令をされたかわかるはずだ。本当は愛されたいのにわざと嫌われるような行動をとる自分のちぐはぐさにおかしくなりながら自嘲して口の端を吊り上げる。

ハワードは沈黙したまま動かない。わたしにキスできても、流石に恥部を舐めるなんて真似はできないんだろう。

「……できないの？ 別にいいのよ。あなたが首を縦に振らなければ、護衛の騎士を変えてもらうだけだから」

最低の試し行為だと自分でわかっているのに、止められない。心臓がドクドクとうるさく脈打ち始める。

「ほんとうに、いいんですか？」

「え？」

熱を孕んだ声色に思わずハワードの顔を見つめれば、瞳孔が広がって、ギラギラと欲情した瞳とかち合う。想像と違う反応に、背筋がぞわっと粟立った。もっといやがられるはずなのに、思っていた反応と違う。

「うれしいです♡マナさまのおマンコ、ずくっとかわいがってあげたいなって

思ってたんですよ♡」

ためらいもせず床に跪いたハワードは、わたしの股座に整った顔をゆっくりと近づける。まだショーツに包まれているはずの恥部を目線で撫でられていると意識するだけで、じわじわと太ももの内側が汗ばんでいく。

「あなたのかわいらしいここにござ奉仕できるなんて、夢のようです♡」

「っ、く、口では何とでもいえるわ……！」

ハワードがわたしなんか性欲していることが信じられなくて、震える声でそう言い返す。彼は軽く肩をすくめてから、笑った。

「まったく、ご自分でござ奉仕しろとおっしゃったのに恥ずかしがってらっしゃるんですか？ 難儀な方だ」

余裕にあふれた態度に、カアツと頬が赤くなる。命令しているのはこちらのはずなのに、いつの間にか主導権が逆転しているようでわたしのほうが焦って

しまう。

「う、うるさいっ、いいから舐めなさい！」

ぐい、と見せつけるように足を開く。緊張と羞恥でプルプルと太ももが震えてしまっているのをバレないように、こっそり大きく息を吸い込んだ。まともに顔が見れなくて、ぎゅっと目を閉じていると、ふにとやわらかくてあたたかい感触が内腿に触れる。ビクッと腰が跳ねて震えそうになったけれど、どうにか我慢した。

「ふふ♡オレが舐めやすいようにがんばって足、ひろげておいてくださいね♡」
いつも抑揚のない声が熱っぽくて、どうすればいいかわからずに戸惑ってしまふ。自分で無茶振りしたのに、逃げ出したくてたまらない。

「あ、やっぱりやめ……」

やっぱりなかったことにしようとしたそのとき、骨ばった指がショーツに掛

かる。カラダを強張らせたその隙に、ゆっくりと降ろされてしまって、誰にも見せたことのない場所があらわになった。

「あっ♡」

外気と視線に晒されて、ひくひく♡と粘膜がわななく。思わず足を閉じようとしたけれど、ハワードは許してくれなかった。

「オレの忠誠を疑わずともよいですよ。あなたの望みであれば、悦んでいやらしい犬にだってなつてあげますから♡」

まるで望んで奉仕したいような口ぶりに困惑している間に、肉土手をぐにと左右に大きく開かされる。まじまじと検分するような視線に、ぶるぶると蜜肉が震えた。

「まったく、ご自分で舐めろとおっしゃったわりには全然濡れてらっしゃらないじゃありませんか。緊張しているんですか？　かわいいですね♡」

やわらかくしめった感触が粘膜に触れる。肉厚な舌がぐに♡とおマンコの溝をなぞるように這わされて、腰を引いてしまいうになる。いっさいのためらいもない、まるで懐いた犬が飼い主の顔を舐めまわすようなためらいのない舌づかい♡肉芽を容赦なくべろべろ舐められて、喉から妙な音が出る♡

「んお♡それっ♡やあ♡」

ぴちゃ♡ぴちゃぴちゃ♡ぢゆるっ♡れろっ♡ぢゆる♡

敏感な場所に唾液が染みわたっていつて、縮こまって震えているおマンコがひく♡とわななく♡やわらかくて、熱くて、少しざらざらとしている。こんな感覚、しらない。

「ふっ♡うう♡」

「プルプル震えて、かわいい人ですね♡いっしょにきもちいいばしょさがしましょうね♡」

いつも冷静なハワードがわたしの恥ずかしい場所を余すところなく舐めまわしていく。敏感な粘膜をゆっくり舌でぞりぞり♡と擦られて、自分の息が湿っていくのがわかる♡

「ああ♡だんだんおマンコがオレに応えてやわらかくなっていってますね♡もつとご奉仕して差し上げますから♡ちゃん♡とぐちょぐちょ♡のかわいいおマンコになりました♡ね♡」

「ぐちょぐちょのおマンコって……、ひゃうっ♡」

整った顔から発せられるいやらしい言葉に、抗議しようとした瞬間秘豆の裏側に舌が這う。べろん♡とめくり上げるように舐められて、粘膜がとろ♡と潤んだのがわかった。じわあ♡と染み出たそれが、ハワードの舌を濡らしている♡

「あ♡♡あう♡」

「おや♡やっーとおマンコの緊張がほぐれてきましたか♡よかった♡もっとお気に召していただけるいやらしいクンニしてあげますから安心してきもちよくなってくださいね♡」

股座から頭を上げて、にっこりと微笑む男にわたしはビク♡とカラダを震えわせる。やめさせないといけないのに、頭に手を置くがまともに力が入らない。わしや、と髪を撫ぜるように指が滑っただけだった。

「おや？ 頭を撫でて褒めてくださっているのですか？ マナさまはオレのクンニをお気に召してくれたのですね♡ちゃんといけるまでがんばってマナさまのおマンコかわいがって差し上げます♡」

ぢゅ♡と頭をもたげはじめたクリトリスにキスされて、ぞわぞわ♡ときもちいいのが脊髓を駆け巡る♡力を入れていない平べったい舌がすっぽりと秘豆に覆いかぶさる♡

「や、やめっ♡や♡あぁ♡」

粘膜をぴったりと密着させたまま、ゆっくりとやわらかい力で左右に舐められる♡やさしく舐められてるだけなのに、勝手に腰から力が抜けていく♡

このまま続けられたら、本当に情けない喘ぎ声をあげてイってしまいう♡わたしはあわてて、自分の発言を撤回した。

「もっ♡いいっ♡あなたの忠誠心はっ♡ちゃんとつたわったから♡こんなこと♡しなくていいから♡」

肉豆をゆっくりねぶられて、舌でぞりぞり♡とこそがれる♡クリトリスから伝わる快感にのみこまれそうになる自分を必死でこらえながら、ハワードを解放しようとした。

舌で丹念に肉豆をこそいでいたハワードがぴたっと動きを止めた。離れた舌先か唾液と愛液が混じったものがねばあ♡と白く糸を引いているのが見えた。

「おや、おかしいことをおっしゃる。オレの忠義を示すためにご奉仕しろといったのは

マナさまでしょう？」

問いかける口調は穏やかだけれど、表情までは取り繕えていない。強い視線でこちらを射抜くように睨みつけてくるハワードに、怖気づいてしまう。

「っ、わ、わたしがわるかったからっ、こんなことさせてあなたのこと試して。

すきでもない女の子のおマンコ、舐めろなんていったから怒ってるんでしょう？」

「まさか。オレがあなたに怒るなんてありませんよ」

ハワードが否定してくれるけれど、それを信じるほどバカじゃない。義務感から発されるやさしい言葉に、縋りたくなる自分がいやになる。勝手に試し行為をしてハワードを

煽って、言葉通りに行動した相手に泣きたくなる。触れる手が優しいだけで馬鹿な期待をするのに、愛されっこないってわかっている。自分でもどうしたいのかわからなくなつて、頭がぐちゃぐちゃだ。

「っ、もういいってば。わたし、聖女やめるから」

聖女をやめれば、ハワードがわたしに従う理由もなくなる。軽率に口にした言葉に、ハワードが眉をしかめた。

「……召喚されたとき、陛下から聞かされたでしょう？ 異世界から召喚された聖女は望むものをなんでも与えられるかわりに生まれ故郷へ帰ることはできません」

「故郷に帰れなくなつて、一人で暮らしていけるもん」

職場に馴染めていたとは言い難いが、日本ではちゃんと働いていた。こちらでもなにかできる仕事くらいはあるはずだ。

「陛下がそれを許すとは思えません」

険しい顔のハワードのもっともな言い分に、わたしはむきになって言い返す。「じゃあ聖女は続けるけど、護衛の騎士は変えてもらうから。ハワードが側にいると、イライラする」

訳も分らず召喚された異世界で、わたしをやさしく支えてくれたハワード。わたしの心の隙間に、ずっと入り込まれてあつという間に好きになってしまった。

けれどしばらく経って知ったのは、異世界から召喚された聖女には見目麗しい若い男を護衛につける慣習があることだった。彼らの役目は聖女をこの世界に留まらせることだから、望まれれば恋人の真似事もしなければならぬ。ハワードの優しい言葉に浮かれていたわたしは、崖から突き落とされたように感じた。自分がバカみたいだとわかっているのに、ハワードの一言一句に、わざ

わざ喜んでしまう癖が抜けない。

「……マナさまはオレのことはもういらないんですか？」

いらぬいもないにも、聖女にもハワードにもふさわしくないのはわたしのほうだ。聖女としての役目をきちんと果たせる自分だったら、堂々とハワードの隣に立てたのに。

黙り込んでなにも答えられないわたしに、乾いた笑いが部屋に響く。

「……おかしいな。オレちゃんと見目はいいと思うんです。そうでないと聖女の護衛騎士候補にすらなれませんから。立ち振る舞いも礼儀作法も、聖女様に気に入っていただけるように厳しく仕込まれるんですよ。もちろん武芸だって完璧に仕上げられます。いざというとき尊いお方を守れないなんて、ただの飾り人形ですから。どんなお役目だって完璧にこなせるように。そういうふうに育てられたんですよ。夜のお役目だって、完璧に果たせます」

いつも理性的なハワードが、わたしを責めたてるように矢継ぎ早に言葉を並べる。こんなに優秀な自分のなにが不満なんだと問い詰められている気がして、情けない。

「……じゃあ、あなたが仕えるにふさわしい女性を聖女にするために宮廷の連中と一緒にわたしを引きずり降ろせばいいじゃない」

「引きずり降ろして誰を聖女にするんです？ あの花の金髪の子ですか？ 彼女に仕えるなんてとんでもない。……オレが仕えるのはあなたただだけだ」

搾り出すような声に、目を瞬かせる。期待してはいけないと言い聞かせながら、琥珀色の瞳をのぞいた。

「物語に語られる聖女さまたちは慈愛にあふれた完璧な女性です。完璧で強く、すこしの綻びもない。でもあなたは、マナさまは違うんですよ。下賤の使用人たちの言葉にいちいち傷ついて、人の顔色を窺って、かわいそうで。オレ

が少しだけ優しくするだけで、かわいらしく頬を染めていましたよね」

「っ……！」

隠していたはずなのに、気づかれていた。全部見抜ぬかれていた恥ずかしさで、鼻の奥がツンと痛む。

「っ、かந்தんな女だとおもって、バカにしてるんでしょっ……」

「ええ。かந்தんで、手に取るように考えがわかって、オレのことを信頼していたくせに、誰に何を吹き込まれたのか不安そうにこちらを窺ってくる。オレのことが好きならさっさと手を出させればいいんです。まさか、心までほしいなんてあまつちよろいことをいつてるんですか？」

「っ……！」

すべて知られている絶望に目を見張る。

「おや、どうやら凶星だったみたいですね。本当にかわいいひとだ」

立ち上がったハワードに腕を掴まれて、そのままベッドに押し倒される。振り払おうとしたけれど男の人の力に逆らえない。

「う、ひつく……うう……、ひどいっ……こうやってなぐさめれば、わたしがよろこぶとおもって、バカにしてるっ……」

「バカになんてしてませんよ♡かわいくて、たまらなくて、どうしてやろうかと思っただけです」

意地の悪い、口の片側だけ吊り上げた笑顔で腰を撫でさすっていく。がっしりと腰を掴まれて、中途半端に昂らせた熱が宿ったままのおマンコに鼻先がコツンとあたった。

「やっ……!」

「いやじゃないでしょ♡オレにおマンコ舐められたかったんでしょ♡」
さきほどまでの遠慮がちな舌のうごきじゃない。女の人を感じる場所を確実に

に狙い撃ちされる♡秘豆の付け根♡べろべろ♡と唾液まぶされるのよわい♡

「ひゃう♡」

「おおかた、ちょっとわがままいえばオレが困り果ててあなたを嫌いになると
思ってたんでしょう？　かわいいですね♡」

ぷく♡と膨らんだ秘豆の表面を舌がゆっくりと舐め上げる。クリトリスの表面だけをなぞるみたいなのどかしい刺激。おもわず腰がゆらめいてしまう♡

「ふっ♡うう♡」

「ちょっとクンニされただけでかわいらしく腰が揺れちゃうのに、オレに嫌われたかったんですか？　こんなにオレのことすきすき♡って訴えてる媚び媚びおマンコのくせに」

愛液をとろとろ流し始めた蜜穴にぐに♡と舌を押し込まれる♡隘路の浅瀬でうごめく感覚にシートを握りしめた。